

令和2年度 連携研究スキームによる研究（委託研究課題）
研究成果等概要報告書

		課題番号	20352884
研究テーマ名	農福連携の地域経済・社会、障害者の心体への効果に関する研究		
委託研究課題名	農福連携効果の学際的かつ定量的研究		
研究実施期間（西暦）	2020年度～2022年度（3年間）		
中核機関・研究総括者	東京都健康長寿医療センター研究所 自立促進と精神保健研究チーム 専門副部長 岡村 毅		

1 研究の進捗状況等

新型コロナウイルス感染症の影響により、視察や、一部のデータ収集に影響が見られたが、概ね順調に推移している。

このような従来の研究枠組みにとらわれない学際的研究にあっては、フィールドを整備し、研究環境を整えることがまず必要である。令和2年度（初年度）は、そのための準備期間という位置づけが大きいですが、準備は整ったと言ってよいだろう。令和3年度のデータ収集や介入が待たれるところである。

① 農作業が精神機能（前頭前野賦活）に与える効果の検証

精神・知的・発達の障がい者対象の脳血流測定に関する先行研究を調査して課題遂行時の障がい者の脳活動の特徴をまとめた。その知見をもとに、今年度は、測定用プロトコル作成まで行った。現在、研究対象となる障がい者を雇用する企業と研究協力協定について最終協議中である。

② 農作業が心体や生産性向上へ与える効果についての調査票開発・調査分析

農福連携を行う農業者、福祉事業所を対象に「障がい者の健康改善や、農業者や福祉事業所の生産性向上には、どのような要因がどの程度影響するのか」を定量的に把握するための調査表を作成した。2月に全国の農業者、福祉事業所に調査票を配布した。

③ 農作業が身体機能に与える効果と生産性との関連の検証

事前調査として、身体活動量調査及び営農実態調査の対象事例（候補地）2事例を対象にヒアリング調査を行い、障がい者の作業内容の詳細と営農概況を把握した。今後、協議を重ね、協力体制を構築し、実地調査に着手する予定である。

④ 認知症の人への農作業の効果の定量的分析

認知症高齢者を対象に稲作ケアプログラムの効果を介入群と参照群を設定して検証した結果、介入群では精神的健康が向上し、主観的な良い変化が示された。日本をはじめとする東アジアの主要な農業である稲作が、認知症ケアに適用可能であることが分かった。今後、英文論文を投稿し世界への発信をする予定である。

⑤ 医療現場における農福連携の定量的研究

研究を実施してきたK病院全体を「グリーンケアホスピタル」として再構築するために、執行部を巻き込んで1)多職種チームを結成し、2)フィールドを整備し、3)スタッフを一体とするために院内アンケートによりニーズ把握を行い、新年度の準備が整った。

⑥ 都市等における農業を用いた地域づくり研究

大規模団地の住民及びNPO法人、区社会福祉協議会、区ボランティアセンター、区高齢福祉担当部署とチームを結成した。区ボランティアセンターをフィールドとし、具体的な準備を行った。4月以降に実際に活動が開始される。

⑦ 「8050 問題」に対する農を用いた支援プログラムの開発

今年度は文献整理とフィールド開拓を実施した。学術研究は極めて乏しいことが示された。「農」を用いた支援は中高年のひきこもり当事者のみならず、高齢である親の相談や居場所の確保を含む、一元化した展開が有用であることが示された。

⑧ 社会的に孤立している人に対する農を用いた支援制度の現状と課題の把握

農福連携の主要な場となる一時預かり型サービスは、対象領域ごとに独自の展開が行われてきた。文献の動向からは、地域福祉の主流化と共生型社会の政策推進によって、領域横断的なサービスが展開されつつあるが、呼称の違いに代表される各サービスと農業を融合するには理念の整理が必要となることが示唆された。